
SAO二次創作 戦士達よ強くあれ

鳩胸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SAO二次創作 戦士達よ強くあれ

【Nコード】

N2880U

【作者名】

鳩胸

【あらすじ】

電撃文庫で絶賛発売中のライトノベル、ソードアート・オンラインの二次創作です。

原作の流れにそって展開していきます。

ところどころオリジナルあり？

序盤は暑苦しい男回が続くと思われませぬ。

この物語はフィクションです。実在する人物や団体や他のものもろもろとは一切関係ありません。

作品内での解釈は、私個人の解釈であり、読者様には違和感を感じ

られる方もいると思います。

設定及び内容は原作に合わせております。

注意！主人公はなんだか強いです（作者である私は、俺TUEEE
が好きです

注意！視点が切り替わるときに用いられる「side」というものを
使用しておりません（私があまり好きではないから

第一話 プロローグ（前書き）

とある小説に感化されまして、この二次創作を始めました。

どうも皆さま始めまして、鳩胸です。

あ、私は鳩胸ではありませんよ？

鳩胸は、私が気に入っている声優さんの特徴です。

勢いで始めましたこの小説、完結までの道筋は正直なところ、考えておりません。

ですが、可能な限り設定を煮詰め、手直しも加えていきながら完成目指して頑張りますので

どうかよろしく願います。

第一話 プロローグ

俺は多趣味だ。

いきなりなんだ？と思ってるかもしれないが、とりあえず聞いてくれ。

小説、漫画、ゲーム、スポーツ、勉強、武術 e t c

俺が中学校に上がった頃だったかな。

その時から、俺はとある病気にかかり始めたんだ。

いやいや、そんな命が脅かされるようなものじゃないさ。

別の意味で（社会的な面）では死を迎える危険もあったがな。

つまりは厨二病を患ったって事だ。

2007年の残暑が厳しかった8月に、俺はこの世に生を受けた。
月野^{つきの}という家に、常に真実を見極め真の強さを持って欲しいという願いの元、真^{まこと}という名前を貰い、俺 月野真は誕生したのだ。

子どもの頃は、テレビなんかを見てヒーローに憧れる。そういった普通の何処にでもいる少年だった。

転機が訪れたのは、そう、初めての定期テストのために徹夜を決め込んで、息抜きでテレビをつけた中学一年の頃だ。

写ったのは、格好いい台詞を言いながら、物凄い強さで敵を打ち砕くヒーローの姿だった。

当時の俺は、何を血迷ったのかそれにはまり、約一年間とにかくその主人公に似ようとして、いろいろなものを始めたんだ。

それによって俺の多趣味伝説が始まる。

近所の幼馴染いわく、俺の容姿はなかなからしい。

そして、アニメの完璧超人主人公に似ようとして、勉強、スポーツ、武術から。その番組のゲーム、攻略サイトを見るために始めたパソコンなど。

多趣味な上、俺は負けず嫌いで凝り性だったりもする。

それらに費やした時間ははんぱなく。勿論、クラスの友達と遊ぶ暇も無い。

俺はだんだんと本当の意味での人付き合いが苦手になっていった。

学校にいる間、表面上ではいくらでも相手に合わせられる。

しかし、心のどこかでは、冷静に状況を見て無駄な時間だと告げる自分も居た。

友達と呼べる人間は居なくなっていた。

そんな、俺から青春の一部を奪った厨二病は、何故か中二の冬に沈静化した。

当時14歳だった俺は、それまでの自分に悶え、暗黒時代と銘を打ち、封印した。

それまで培った、学力 知識 運動能力は勿論活用した。

武術なんかは使い道が分からない上、自衛手段として鍛えることは止めなかったが。

まあ、武術といっても体捌きや足捌きなどを教えてもらっただけで、実際の型などは知らないが。

結局、自衛手段としては逃走が一番だ。

2022年11月1日 t u e

俺のクラスは、というより学校全体が、一つの話題で持ちきりだった。

これまで、発表されたゲームの中でも一番の新作であり、期待の詰まった次世代型。

仮想大規模オンラインロールプレイングゲーム、通称VRMMORPGとよばれるジャンルに分類される、新たな世界。

ソードアート・オンライン、略してSAOの発売が間近に迫っていたのだ。

「月野〜！お前SAOかうの!？」

クラスメイトの、男子その一が俺に話題を振ってきた。

「……………どうかな？」

返答としては無難。

しかし、男子その一は腑に落ちないような、つまらなそうな表情を隠そうともせず

「あっそ、じゃ、いいわ!」

なんともあっけなく、今日の初めての会話は終了した。

半年も前、2022年の5月に発売されたマシン“ナールヴギア”^S。それが、今話題の仮想大規模オンラインロールプレイングゲーム^R、ソードアート・オンライン^Aを動かすゲームハードの名前だ。

その構造は、前時代の据え置きマシンなんかとは全く違う。

頭から顔までをすっぽりと覆う、流線型のヘッドギア。それが次世代のインタフェースだ。

内側にある無数の信号素子が発生させる多重電解により、ギアはユーザーの脳と直接接続する。

ユーザー、つまり俺達は、己の耳や目ではなく、脳の視覚野や聴覚野にダイレクトに与えられる情報を見、聞くのだ。

しかも、それだけではなく、嗅覚や味覚、触覚を加えた五感全てにナールヴギアはアクセスできるのでそうだ。

ヘッドギアを装着し顎下で固定アームをロック。

開始コマンドである“リンク・スタート”を口にすれば、ありとあらゆるノイズ、現実世界のしがらみからは遠ざかり視界は闇に包まれる。

じきに中央に出現する虹色のリングをくぐれば、そこは既にデジタルデータで構成された別世界だ。

そしてこの完全なる“仮想現実”^{バーチャル・リアリティ}はこう呼ばれた

“完全^{フル}ダイブ”、と。

「……宿題やる」

と、俺は開いていたページを閉じて、パソコンの電源を落とす。

机の上は整頓している。俺は綺麗好きだ。そして凝り性だ。

最近の話題、つまりはSAOなんかに興味は無い。俺の暗黒時代

は過ぎ去ったんだ。

ゲームよりも勉強が、受験生である俺には重要だろ。

そうして、俺は順調に宿題を解いていく。

…………ふと、手が止まった。

いや、別に問題が分からないわけではない。もっと別の事だ。

V R M M O R P Gとは仮想空間で、それも現実の顔は分からない者同士、一緒にゲームをやるってことだ。

幸い、俺のゲームの腕は高い。

幸い、俺はナーヴギアを持っている。

つまりだ。この仮想空間に行きゲームをすることで、俺は人付き合いを取り戻せるのではないのか？

「これは…………チャンスだ」

俺は、親にどう言えばS A Oを買ってもらえるのか、宿題を机の上から払いのけて考え始めたのだった。

第一話 プロローグ（後書き）

後書きですね。

え、と。この小説を書き始めるのにあたって、勢いだけではちょっとと思い、色んなサイトを見て回りました。

そして、夏休み企画、見れていないことに気が付いたしだいです。
シヨック！

すこし、やる気がそがれました。

設定とか、いろいろ難しいです

改めて、小説を書かれている方の凄さを思い知りました。

第二話 始まる悪夢（前書き）

第二話です。

前話では、真がとある目的のためにSAO入手を決意しました
果たして、真は一万本しかないSAOを買えたのか？

ちなみに、真の家は金持ちです。

クラスメイトに話しかけられたのも、それが原因で
ナーヴギアを持っているのもそれが原因です。

さて、始まります。

第二話 始まる悪夢

2022年11月6日 san 13:34 始まりの街付近

草原

「らあっ！」

掛け声と共に、真の手に握られている槍

ワンハンド・ショート・スピア

片手短槍は赤いライ

ト・エフェクトを纏わせながら、目前に迫った青猪の鼻頭らにヒットした。

左手を前に、短槍を持つ右手を後ろに引き、左が前になるようなやや半身気味の構えから発動するソードスキル“デルタ・ファスト”は、三連撃の出が早い、片手短槍の初級スキルである。

青猪 正式名称“フレンジーボア”が突進の勢いを殺され、さらにカウンターを受けたことにより大きく怯んだ。

真は、その隙を逃さずに更に二撃、ライトエフェクトが消えない前に、鋭くスピードの乗った突きを、横腹に叩き込む。

威力は低い、出が早いのと次への一撃に繋げやすいのがデルタ・ファストの特徴だ。

その、カウントにすら入らないのではないかと思わせるほど短い硬直時間は、青猪が更に仰け反ることで消化される。

突き出したままの槍を少しばかり持ち上げることで、次のスキルへと繋げることができる。

「とどめ、だあッ」

体を巻き込むような感じで、片手短槍を頭上に持ち上げ、左足を軸に 回転。

今度は白いライト・エフェクトが武器に纏われ、軌道を残しながら青猪に迫る。

右足で踏み込み、回転の勢いも追加しながら青猪の頭に叩き込まれる、頭上からの振り下ろしの一撃。

片手短槍の初級スキル“エインズ・スキャルグ”は、体ごと回転させ勢いをつけての振り下ろし攻撃だ。

発動タイミングが難しく、敵が硬直もしくは怯んだときにしか使えない。

更には発動後の硬直時間も長めで、外すと一撃以上貰うのを覚悟しなければいけないという、なかなかに使え時が難しいスキルだ。

その分効果は申し分ない。

青猪は地面に叩きつけられHPバーが消滅、ぶぎーと一声なくと、まるでガラスが砕けるような綺麗な音を響かせて、その巨体は砕け散った。

それと同時に、俺の目の前に紫色のエフェクトで、加算経験値の数字が表示される。

「……っし！」

それを確認した真は、片手短槍を持ったまま小さくガッツポーズを決めた。

俺はフレンジーボアを、とういうよりは初めて使ったソードスキルで、初めて遭遇したモンスターを倒せたことの感動で思わず小さめだがガッツポーズを決めていた。

ここは巨大浮遊城“アインクラッド”第一層の南端に位置する、ゲームの開始地点である始まりの街をでて、西に向かい少ししたところにある草原だ。

今は太陽の日差しを受け、四方に続く緑がいつそう映えて見える。

遙か北には森のシルエツトが、南には光を反射しきらきらと輝く湖が、東には出てきたばかりの街の城壁が薄く見えた。

西には、遙か遠くまで果てなく無限に続く空と、純白にかけ落とされた雲が群れをなして浮かんでいる。

この場所には、同じようにモンスターと戦っている複数の他のプレイヤーがいる筈なのだが、空間の恐るべき広さゆえか、俺に視界には入ってこなかった。

俺は体になじむように、もう何回か先ほど発動させたスキルを繰り返して放った。

決められた構えを取ると、ライト・エフェクトがきらめき、ソードスキルが発動するのだが

俺は未だに、この妙な感覚に慣れていなかった。

そもそも、体が勝手に動くというのが無性に気持ち悪かったのだ。

「これならスキルなしでやった方がいいかもな……」

しかし、スキルなしで戦闘をこなすのは難しい。

当然、武器を使った戦闘に関しては初心者もいいところの俺は、与えられるダメージも少ないし、そもそも筋力値も敏捷値も足りなさ過ぎる。

レベル1なら当たり前なのだが。

しかし、それでもスキルにのみ頼るのはなんか嫌だった。

折角鍛えた体捌きと足捌き、ここで使わずしていつ使う？

「……実験だ」

なにはともあれ、実践で試すほか無い。

俺は片手短槍を持ち直すと、次なる獲物を目指して草原を走り出した。

そろそろ、インしてから四時間は経過するか。

ちらりと、視界の端の方に表示されている現在時刻を見る。

16:40

そう表示されているのが確認できた。

サービスが開始されたのが13:00ジャスト。

少しばかり遅れてインしたので、大体三時間半経過したことになる。

ぶぎーと、すでにこの三時間で聞きなれた鳴き声が、右前方から聞こえてきた。

いわずと知れた、フレンジーボアである。

その青い毛に包まれた巨体を、似合わないスピードで野を駆けてくる。

「…よし、こい！」

既にこいつの行動パターンは解析済みである。

いったいどれくらいこの青猪の同属を、ただの無機質なポリゴンへと変えたか。

おそらく二桁は下らないだろう。

まずは突進。

ただ単に前へ突っ込むだけのそれは、避けるのに易い。

ギリギリのところまで足を滑らせるようにして、スライド移動で右側へ。

そうすると、青猪は少しばかり勢いを殺すために、次の行動へのラグが生じる。

ここが第一のねらい目だ。

すかさず走って接近し、後ろから突く。

一撃、二撃、三撃といれたところで今度は後方へ少し下がる。

背後から攻撃を受けた猪は、振り返り様に巨体と牙で攻撃を仕掛けてくるのだ。

「しっ！」

振り上げた前足を下ろす瞬間、二度目の攻撃チャンスが訪れる。躊躇わずに、今度は二撃を鼻面に叩き込む。

ぶぎーと弱弱しい声を上げながら、フレンジーボアは後退した。怯んだ。

この瞬間は、一番の攻撃チャンスだ。

俺は連撃を加えるために構えをとる。

左手を前に、右手で構えた槍を後ろに引き、左が前になるようにやや半身に構える。

ソードスキル“デルタ・ファスト”

青いライトエフェクトを纏った槍は、空気中に水流の線を描くようにして、三度、フレンジーボアに叩き込まれた。

その連撃は、残りのHPバーを完全に吹き飛ばし、一ドット余さずに消した。

ぶぎやーと情けない悲鳴を上げ硬直したフレンジーボアは、次の瞬間にはガラス塊を砕くような大音響をあげ、微細なポリゴンの欠片となって消え去った。

俺の目の前には最初と同じように、紫色のエフェクトで加算経験

値とドロップアイテムが表示される。

「ふう…次のレベルまではあと少しか……」

当初の目的も忘れ、ただ自分のステータスを上げるためにソロで狩り続けた俺は、既にレベルを二とし、三レベルの後姿も見えてきたところだった。

そして、俺が誰にもなく呟いた 瞬間だった。

「な、なんだ!?!」

突然、リンゴーン、リンゴーンという、鐘のような あるいは何かの警戒音のような大ボリュームのサウンドが鳴り響き、俺はその場で飛び上がった。

そして次の瞬間、俺が周りを見渡す間も無く、青い光の柱に包まれた。

イベントか、それとも別のなにかなのか。

突然の事で困惑しながらも、俺が次の行動をとる前に、体を包んでいた光がいつそう強く輝き、俺から視界を奪い去った。

青い光が薄まると、とそこはさっきまで居た森の近くの草原ではなく。

広大な足場に広がる石畳、RPGお得意の中世ヨーロッパを彷彿とさせる街並み、そして正面の方向には黒光りする宮殿。

間違いない、ここは始まりの街の中央広場だ。

現状確認とばかりに、いろんな方向に目をやるプレイヤーが多数見えた。

ここには俺だけではない、何百、何千？……いや、おそらくこのゲームにインしている全てのプレイヤーが集められているのではないだろうか。

まわりは何処も美形ぞろい、見るに耐えない光景ではなく、そこには安堵する。

もしこれが現実世界の顔ぶれそのままとしたら、おそらく俺はここに居ることが出来ないだろう。

………そういう俺は、全ての容姿ステータスが現実世界のままなのだが。

そもそも、キャラクターメイキングは良く分からなかったため、そして時間が遅れているのもあって焦っていたため、飛ばしてしまっただ。

ふと後ろを振り返ると、更に二人追加で現れたようだ。

赤みがかった髪を額の悪趣味な柄のバンダナで逆立て、長身痩躯を俺と同じ簡素な革鎧かわよろいで包み海賊刀カトラスを腰に差している、剛毅で整った凛々しい顔立ちな、戦後時代の若武者のような男。

もう一人は背は低めだが、ファンタジーの主人公然とした整った顔立ちで黒髪の、背中に片手剣ワンハンドソードを差しているベージュのジャケットの男だ。

「あ、おめえよ、これがどういことかわかるか？」

俺のあからさまな視線に、武士のような男が話しかけてくる。

「……すまない、俺にも、なにがなんだか……」

はつきりいってこの異常な事態に、俺は何の情報も持つては居ない。

と、いうよりだ。この状況を予知していた者も、そしてこの状況を正しく理解している者も、おそらく存在していないだろう。

「いや、すまねえな。…オレもコイツも訳がわからなくてよお」

そういって、武士の男は隣のファンタジー男に顔を向ける。

しかし、この状況ならログアウトすればいいんじゃないのか？

「…ログアウトボタンが、ない？」

「そうなんだよなあ。……オレもよお、少し前に見たけどねえんだわ」

「こんな事態だ、強制的なログアウトもない事だし。……運営側のミスとは思えないな」

俺が気が付いた異変に、既にこの二人は分かっていたようだ。

両者ともすこし気落ちしているように見えるが、動揺したそぶりは全く無い。

そもそも、ファンタジーの方はこの状況を冷静に判断できるようだ。

やはり、運営側のミスではないとして、この状況はなんなのだろう

うか？

周りからも、焦れてきたのか物騒な野次も聞こえてきている。

「ん、あれは……なんだ？」

もうお手上げだ、とばかりに俺は空に顔を向けた。

……と、何か妙なものが見える。

「おいおい、なんだぁありゃあ……？」

「……………」

俺の声に反応してか、二人も上を見上げる。

上空百メートル、第二層の底を、真紅の様子が染め上げていく。

良くみればそれは、なにかの文字のようだった。

【Warning】 【System Announcement】

やや驚いたが、みてみれば理解できた。

むしろ、やっとかという思いの方が強い。

二人もどこかほっとした表情を浮かべているようだ。

しかし、俺達の期待を裏切るようにして、事態は動いた。

真紅の文字は、まるで血液が垂れるようにして、大きな人型の巨人を描いたのだ。

それも真紅のフード付きローブを纏った、顔も見えない気味の悪い20mの巨人を、だ。

まわりのプレイヤーも気味悪がっているのもいれば、単純に顔が見えないことを疑問に思っているもの、それに対してふざけているのだと思ひ憤るものなど、様々な反応を示す。

そうも言っている間に、巨大なGMと思しき巨人は手を広げた。しかし、その下には肉体など存在していなく、白い手袋だけが切り離されているように見えた。

正直、気味が悪すぎる。

そんな、俺が後ろの二人に聞こうとした瞬間だった。

『プレイヤー諸君、私の世界へようこそ』

低めで落ち着いた雰囲気のある、おおよそ男性で間違いないだろうと思える声が、広場全体に響いた。

これこそが、悪夢のゲームの始まり。

そして二年もの月日を戦いに明け暮れることになるとは、このときの俺は、知るよしもなかった。

第二話 始まる悪夢（後書き）

はい。

どうだったでしょうか？

今回は前回とは違い、少し長めに書いてみました。

主人公とクレイン、キリトが出会いましたが、どちらも名乗っては居ませんね。

まで、知り合い未満といったところですよ。

こんな状況なら仕方がないでしょうか？

といいつつも、やっと序盤に入ったところですね。

これでとりあえず、始まりの章は終わりです。

次からは少し成長した真と、真のゲーム内での名前が明らかになりますよ。

乞うご期待！

第三話 出会いと(前書き)

今回は前回の続きより、少しばかりすすんだところからお送りします。

というのも、ぶっちゃけたはなし、芽場さんの話、ながくて描写が難しいです。

私の技量なさと断念。

というしだいであります。

申し訳ありません。

それでは、第三話、どうぞ。

第三話 出会いと

『……以上で“ソードアートオンライン”正式サービスの手配が完了する。プレイヤーの諸君の健康を祈る』

そんな皮肉とも取れる台詞を残したあと、GMであり実質この世界の神である男 芽場晶彦は姿を晦ました。

といつても、本人の顔は知らないし、当然現れたGMの顔も分からなかったもので、こいつが本当に芽場晶彦なのかは確かめようがないのだけれど。

呆然とするものや、ヒステリーを起こして泣き叫ぶもの、発狂するもの、地面に座り込むものなど。

広場に集められた、約一万人のプレイヤー達は様々な反応を取っていた。

俺はというと、これからの事について考えを纏めている。

しかし、正直言つとこの場から早く離れたい。

リアルの顔、リアルの表情。

この世界にリアルを求めている俺は、この状況が気持ち悪くて吐きそうだった。

現状、俺がこの世界で生き残るには幾つかの手段がある。

まずは何もせずこの“始まりの街”で大人しく、ゲームがクリアされるのを待つ事だ。

所詮空腹や疲労を感じるが、それはあくまでゲーム内での話して

ある。

現実の、ナーヴギアに拘束されて食事も取れない状況の俺には、全く持って被害は無いのだから、どこかの一室にこもり続けていればじきに終わるだろう。

その極限状態が、いつたい何年続くのか想像もできないが……。

もう一つの手段は、どこか強そうな奴等のパーティーに入れてもらい、ずっと寄生して生きていく方法だ。

これは成功率が極端に低いと考えると間違いはないだろうが。

なにせ、この世界は今や限りある資源をどれだけ多く自分のもの出来るのが、生き残るのに重要なポイントとなっている。

そんななかで、ただ寄生して旨い汁だけ吸っているようなやつをおいておくほど、馬鹿で良心的なチームもないだろう。

むしろ俺ならば、真っ先をそれを見捨てるに違いない。

いや、殺すとかではなく、街でチームを解散するってことだが……。

最後に、自分自身のレベルを上げて、攻略に参加し、いち早くクリアすることを目指すという方法。

これは、死亡するリスクが、他の二つに比べて極端に高いというデメリットがある。

勿論、俺はこの世界についての情報を持ち合わせていないことだし、未踏の地に足を踏み入れて危険と背中合わせなんて状況が、それこそ日常のように訪れる可能性が高い。

しかし、だ。

限りある資源や、モンスターのポップを永遠と待ち続けるよりは、こっちのほうが効率が良く、そしてなにより俺の性格にぴったりだ

と思った。

元はといえば、対人スキルを磨くために始めたゲームだ。

軽い気持ちでインしたのが、まさかこんな事態に発展するなんて……。

しかし、これらの点を踏まえて、全ての案を纏めると。

現実問題としては三番目の“攻略に参加”が一番有効的だと思う。

当然、ゲーム内でタイムリミットは決められていないが、現実の俺はどうなっているのだろうか？

体は衰弱していくだろうし、なにより栄養が取れないのだ。

芽場晶彦も言っていた通り、近隣にあるちゃんとした設備の病院に、それこそ自費ではなく何らかの補償金で入院することになるだろう。

その場合、栄養などの健康面での問題は、医療機関にいる限り考えなくて大丈夫だ。

それより、残された俺の体の筋力面での心配がある。

とある研究で、三日間寝たきりの状態で生活すると、起き上がるうとしたときに、地面に足をつけて立ち上がることが出来なかったと聞く。

このゲームをクリアするには三日なんて一瞬と大差ないだろう。

つまりだ、このゲームをクリアしたところで、現実世界の俺はちゃんと生活できるのか？

こういつ疑問が発生するわけだ。

当然受験も出来ないし、進学も出来ない。

俺は戻ったときに社会復帰が難しいと判断する。

ならば、その可能性を高めるためには、一人でも多く攻略に参加し、そしていち早くゲームクリアを目指すほかはないだろう。

「……やることは、決まった」

幸いにも、俺は今のところレベルだけでいえば上位に位置するところだろう。

それに、こちらの世界での通貨“コル”も、フレンジーボアを討伐しまくったことで、結構貯まっている。

あとは、ドロップアイテムを売れば更に増えるだろう。

問題はその後どうこう略していくかだ。

「いや、考えていても仕方がないか…」

ここにいるプレイヤーが、精神的に立ち直るには三日はかかるはずだ。

それまでここで狩る……のは得策じゃない。

テストターの存在だ。

対して偏見もないが、彼等の持っている情報は魅力的だ。
第六層までしか攻略できていなかったと聞くが、逆に考えると、
第六層までは知り尽くしているということだ。

おそらく先ほどまで後ろに居た二人も テスターだったのだろう。
あの、芽場晶彦の宣言を聞いた後、動揺するも早速何処かへ走り
出していったのだから。

……しかし、あいつら俺の顔を見て物凄く驚いていたな。
やはり、現実と同じ顔で最初からインしていたのは驚きだったの
か。

「まずは、NPCのショップへ行こう……」

ドロップアイテムを売って、コルに変えてから、次の街へ行くこ
とにしよう。

俺はそう考えて、広場から離れたところにある路地に入っていっ
た。

「ありや？…おめえは！」

「…カッコいい武士の中の人だ」

NPCの店でドロップアイテムを売り、それから色々な武具屋を回り、自分の装備一式を安めの場所で買い集めてから少ししたところ。

俺は再びフレンジーボアで戦闘の勘を確認するべく、草原に来ていた。

三匹目のボアをポリゴンの塵に変えたところで、後ろから呼び止められた。

振り返ると、そこにはこの世界でごく少数の知った顔が合った。

とうかが、黒髪の少年と一緒に居た、若い兄さんだ。

「おいおい、その呼び方はねえんじゃねえの?」

「……ごめん、でも名前知らないし」

よくよく見ると、若い兄さんの後ろには、同年代くらいの人たちが数名見えた。

「…それもそうだったな。おりゃクラインって言うんだ、で、こいつ等は俺の仲間達だ」

若い兄さん、もといクラインは、後ろにいる数名の人たちを指してそういった。

「……よろしく、クライン。俺はフレンダ、さっきの黒髪の少年は？」

ちなみに、俺のアカウント名であるフレンダは、フレンドリーからもじってる。

最初はちゃんと他の人と交流しようと思ってたんだよ。

「ああ、キリトとは別れた……。あいつはよお、今頃は村についてんじゃないかねかな」

黒髪の少年、もといキリトのことを聞くと、クラインは少し表情を沈めながらそういった。

どうやら別れるときに何かあったようだ。

おそらく、クラインと今一緒にいる仲間のことだろう。

テースターだと踏んでいたんだが、それはキリトだけだったようだ。

この状況で、あの年くらいのもといっても真、もといフレンダとは一つしか違わない。奴が、この短時間で立ち直って尚且つ攻略に出るなんてありえない。

「そうか、じゃ、俺もそっちへ行くかな……」

俺の次の行動は決まった。
能力値をどう上げるかも決めだし、あとはどんどん進むのみ。

「お、ちょうどいいじゃねえか。…俺たちもよお次の村へ行こう
と思っただんだ。一緒に行こうぜ」

…少しばかり面をくらった。

思わずきよとんとしてしまったのも、自分でも分かるししようが
なかっただろう。

それくらい、クラインの申し出は予想外だったのだから。

「……いいのか？」

改めて聞く。

本当に、俺みたいな奴がパーティーに入っているのかを。

「なにいつてるんだおめえ、俺が誘ったんだからいいに決まっ
てるだろ？」

クラインがそういった途端、後ろの仲間も口々に賛同の意を示し
てくれた。

「正直言つてな、オレ以外はあんま戦闘を経験してねえんだ…。
だからよ」

「……ああ、そついつごと」

にこにこ微笑む仲間達には聞こえずらいように、クラインは少し身をかめながら俺に告げてきた。

正直、良かったと思う。

このまま理由も分からずに仲間になるよりは、こつやって目的を最初に話してくれた方が気が楽だ。

何をすればいいのかも分かるしな。

「すまねえな、なんか打算で誘っちまってよお」

「…いや、悪くない。むしろそつちの方が、俺としてはありがたいよ」

そう、包み隠さず、俺は自分の思っていたことを告げた。

この男には、クラインにはそれがいいと思ったからだ。

クラインは、なにか他のやつとは違う雰囲気を感じる。

こつ、俺の中にすんなりと入ってくる感覚といえは分かるのだからか？

決して特別な感情を抱いたわけではなく、ただ、この男は、俺にとって何かを変えてくれそうだな、そんなに気がしたのだ。

「そうか。……ははっ、おめえ面白いやつだな！」

クラインはそういつて笑った。

俺も釣られて笑った。

生死をかけたデスゲームが始まったばかりというのに、俺たちは、草原の真ん中でしばらく笑っていたのだった。

第三話 出会いと（後書き）

どうも、ここまで読んでいただいてありがとうございます！

さて、原作キャラとちゃんとした形で接触した真、もといフレンドであります、いかがだったでしょうか？

いやあ、口調が難しい！

オリジナルのフレンドは簡単に書けるのですが（最初に…をつけるのが特徴）、クラインとかキリトとかがもう！

考えていた段階で、すでに頭はオーバーヒートですよ。

毎度の事ながら、改めて他の作者様の技量に驚いております。

そういえば、フレンドって名前は女っぽいですよ。

実は、まだ出ていませんが、それに関しても少しばかり話を考えております。

いえいえ、由来とかはいいましたからそつちではないですよ。特にフレンドという名前に深い意味も込めていませんから。

結局何がいいたいんだ私は！

まあ、後書きも含めて、小説を書くのは難しいなと思うしだいであります。

あ、インターネットであつたらしいのですが、夏休み特別企画で第一層のボスに関しての描写が出たとか出なかったとか……。

もし、知っている方がおりましたのなら、情報を教えていただけるとありがたいです。

それでは皆さま、次回の前書きでお会いしましょう！

第四話 村、到着（前書き）

こんばんわ！鳩胸です。

前回、クラインン一行と合流して共に次の村へ進む約束を交わした
フレンダでした。

今回は村に到着した話です。

それでは皆さま、また後書きまで。

第四話 村、到着

「うおお、やっとついたぜえ……」

俺の横で大きさに、体を屈めて膝に手を付き大きくため息をついているのは、つい一日前にフレンド登録した仲である、カトラス海賊刀使いのクラインだ。

クラインとその仲間達で立ち上げたらしいギルド、ふうりんかざん風林火山のメンバー八人は、以前別のゲームで共に攻略をしていた仲間なのだろうだ。

その実、連携や周りへの気配りは上手かった。

しかし、どうやらSAOには今までのゲームの常識は通用しないらしい。

これは俺も身をもって知ったことだが、まず、技の発動が困難だということ。

SAOの魅力の一つである、自身の武器にライトエフェクトを纏わせながら、強力な攻撃を繰り出すことが出来るソードスキル。

これを発動させるには、まず、発動条件ともいえる“決められてる姿勢”をとらなければいけない。

今までのように、画面で技を選んだら直ぐ発動するようなものではなく、モーションに入るためには、その初期動作の構えを取らなければいけないということだ。

例えば俺が良く使う、短槍の初期スキルであるデルタ・ファストで考えてみる。

これを発動させるのには左を前にした半身の構えを取らないといけない。

しかし、戦闘に入った場合、相手の攻撃を避けつつ自分も動き続けている状況で、とりたい姿勢を直ぐに取れるのかと仮定すると、これは実に難しい。

完全に相手の動きを把握し、余裕を持った状態で、二手三手先の行動を考えながら戦っているのならまだしも、俺たちは戦いのプロではなく、ましてや武器なんて始めて握るような奴等ばかりだ。

いくらシステムのアシストがあるからといって、そこに至るまでに苦戦し、発動できずに敗北なんてざらにある。

戦闘に関して言えば、こればかりは慣れていくほか無いということだろう。

だが、ソードスキルの難しさなどは、あれほど説明しておいてなんだが、序の口だ。

一番の問題は、心、である。

他とは違い、SAOはVR　ヴァーチャル・リアリティーのゲームだ。

感じ方はすこし鈍くても、実際にプレイしている俺たちが感じるものは現実と大差ない。

そんななかで、実物大の大きさのモンスターにであうとしたら？

二度目だが、如何にゲームといえど、俺たちプレイヤーの感じ方は現実と変わらないのだ。

森でモンスターとエンカウントする、草原を歩いていたらモンス

ターに襲われた。

見た目も醜悪で恐ろしいモンスターが、なんの前触れもなしに自分を襲いにやってくるのだ。

そこから感じる明確な敵意は、たとえゲームといえど無視できず、そのだんかいで心が折れれば、待つのはリアルでの死だ。

いままで、どんなゲームでどれほどの強敵を討伐していたとしても、それはこの世界ではなんのプラスにもならない。

この世界で重要になってくるのは、心の強さと、冷静さを保つこと、そして絶対に負けないという信念だ。

それを確認するのに、始まりの街からこの村までの道のりは、まさにぴつたりといえるものだった。

「…そうだな、俺も少しつかれた」

俺は、とうとう地面に寝転がりだしたクラインの隣に立つと、村の様子を窺いながら答えた。

疲れたのは、当然肉体の方ではなく、精神だ。

ここまでの戦闘は、主に俺はピンチのときのフォローを担当していたが、結構過酷だった。

最初から討伐しまくったフレンジーボアをはじめとした、モンスター三十数匹のプレゼントだ。

初期ステージのポップじゃないぞこんなの！なんてばやく暇があるなら戦う。

そんな状況で、ようやくこの村まで辿り着いたのだ。

クラインだけではなく、ほかのメンバーも疲労を隠しきれて居ないようだ。

地面に四つん這いになっている者や、手足を投げ出しているもの、拳句にはすこし寝入っているものまでいる。

まあ、SAOでの最初の戦闘があんなバグみたいなモンスター沸きまくりでは、精神的に堪えるのだろう。

しかし、ここまで誰一人として死なずにすんだのは、連携の高さやクラインの指揮ではなく、単純に運が良かっただけなのだろう。

その証拠に、一番初めにHPゲージがレッドになった奴は、残りの道のり、距離にして約二倍を、なんとノーダメージで抜けているのだから。

これが運ではないのだとしたら、システムがそうプログラムされていたとしか思えない。

だが、不幸中の幸いというべきか、この異常ポップのおかげで、風林火山のメンバーの平均レベルは二に底上げされているし、俺とクラインにいたってはその更に二つ上に到達していた。

現在俺はHPが434/434だ。

初期の342/342と比べると、なんと92も差がある。

つまり、俺は92の分、死ぬ確立が下がったというわけだ。

さらにスキルの熟練度も上がり、片手短槍スキルは12、索敵スキルは5、武器防御スキルは19になっている。

「…んじゃ、中に入ろうぜい」

と、ようやく立ち上がったクラインが、未だに休憩中のギルドの面々に向かい、疲労感を滲ませながら告げた。

「おう…」

「わかった」

「ま、まて…あと少し」

風林火山のメンバーは、口々に了解の意を取れる返事をし、のそのそと起き上がる。

ここだけみると、休日のお父さんのようである。

「…まずは宿とりだな」

俺は俺で、自分のこれからの行動を考えながら、まるでゾンビのように歩いていくメンバーの後ろから、村の中へと足を踏み入れていったのであった。

第四話 村、到着（後書き）

どうも、また会いましたね。

さてさて、今回は少しばかり休憩回ということだ。

まことに勝手ながら、最近私の予定が詰まっております。

九月は行事が多い！

………今は八月なんですけどね。

次回はバトルに入るつもりです。

原作では八巻で、キリトが受けていたとある親子のクエスト。

達成すると、なかなか高性能の片手剣がもらえるらしいですね。

風林火山のメンバーの中にも、キリトと同じ片手直剣つかいが居ます。（この小説の中での設定ですよ）

そいつのために、情報を手に入れたクライナー行は、フレンドの元を訪れるのです。

ではでは、次回、またお会いしましょう。

第五話 植物、森、戦闘！（前書き）

皆さまこんばんわ、鳩胸です。

私事ではありますが、本日、また一つ年を重ねました！

大人の仲間入りまであと三年、R18をプレイするにはあと一年と迫りました！！

はい。

今回は、題の通り戦闘に突入します。

始まりの街から一番近い村での戦闘。

最新八巻を読んだ方ならわかりますね？

キリトが、とある剣士と挑んだクエスト。そこにフレンドとクライン一行が挑むわけです。

テストアではない彼等にとってすれば、初めて受けるクエストであります。

緊張と期待、そして不安の入り混じる初クエスト。

ちゃんと実付きを討伐できるのか？

勝手が分からない十人が、いよいよ森に入ります！

第五話 植物、森、戦闘！

朝だった。

あの、芽場晶彦によるデスゲーム開始の宣言を受けてから約半日。俺は始まりの街を後にし、近隣の圏内である村に滞在していた。

とりあえず、フレンジーボアを倒しまくったことでコルを稼いでいた俺は、村の宿屋に泊まっていた。

シングルで一部屋、ベッドは木製で硬く、バネも無ければクッションもない。

布団は薄く、枕もつぶれていた。

とりあえず一言、これでどうやって寝ると？

俺は、意外と寝つきが悪いのだ。

「うう…ねむい…」

プレイヤー個人にしか聞こえない音で、決められた時間に必ず強制的に起こしてくれる“強制起床アラーム”の、なんの音楽なのかも分からない、爆発音のような騒音で目を覚ました俺は、とりあえず二度寝を避けるためにベッドから這い出た。

右端の時計を見ると、時刻はAM 6:30と表示されている。

うむ、実に時間通りだ。

しかしながら、あれだけ寝づらかったベッドも、一度這い出て寒

い外気に触れると天国のように思えてくるから不思議だ。
やはり、暖を取るには布団が一番だと思う。

いつまでもこのままグダグダしてられないので、取り合えず部屋の鍵を開けて外に出る。

この宿屋は、単純に泊まるだけのもので、食事も付いていなければその他サービスも皆無。

よって金額は驚くほど易い1000コルだが、しかし、俺はこの宿の雰囲気は気に入っていた。

部屋を出て直ぐに目に入る木製の壁、丁度俺の視線くらいに設置されているガラス張りの窓。

そこから見える朝日は、アインクラッド第一層を明るく照らし、この世界に閉じ込められた俺たちを、まるで歓迎しているようにも見える。

宿屋は二階建てで、部屋は全部で十二。1階に二部屋、二階に十部屋だ。

どうもここに暮らしているNPC(ノン・プレイヤー・キャラクターと呼ばれる、システムで動くキャラの事)は1階に住んでいるようで、こういう構造になっているのだとか。

昨日宿屋に泊まりに来た二人組みの長剣使いが話していた。

宿屋の、木製である両開きのドアを開け、外に出ると、そこは昨夜とはまるで別世界だった。

外と比べて、この世界の文明は低く、よって起床時間も早くなるのだらう、沢山のNPCとおぼしき人影が行き交っていた。

そんな中、俺は一人で村の外へ向かう。

勿論、先を急いで進むわけではない。

昨日セッとしたまま未使用だった、投擲スキルとやらを試してみたいのだ。

夜、宿屋に入る前に手に入れたスローイングダガーを、アイテムウィンドウからストレージしてポーチにしまう。

物質化したダガーの入るポーチは、回復ポーションだけの最初とは違い、確かな重量を感じさせた。

「さて、と……」

昨日熟練度が少しばかり上がり、周囲の気配とかが少しだけ分かるようになってきた俺だが、流石にこの朝霧の中、目的のmobを見つけるのは難しい。

周りを見渡して歩いていても、周囲五メートルくらいしか見渡せない。

これでは鼻の効くmobに逆に攻撃されなかが心配だが、索敵スキルのおかげなのか、自分に攻撃してくるモンスターであれば、相手の間合いに入る前に感知できるから一応大丈夫だと思っている。

「……ん？」

村を、始まりの街とは逆方向に、つまりはこの先進むであろう進路の方向へ出てきた俺だが、視界が最悪な状況で頼っていた耳が、昨夜聴こえたとある泣き声を拾った。

ポーチからダガーを一つ取り、泣き声の方向へ体を向き直す。するとどうだろうか？ いままで何の反応も無かったマップに、mobを示すマーカーが表示された。

思ったとおり、表示されたのは“フライアーミン”の名前。

体重もHPもかなり軽く、それでいて逃げ足が速い真っ白な鼯イタチだ。

昨日の戦闘時にも、フレンジーボアやその他のモンスターに混じりつつ、絶対に攻撃範囲に入ってたこなかった不思議なモンスター。

HPが少ないのは、昨日の戦闘時に確認済みだ。

風林火山のメンバーである、槌使いのロイドのソードスキルでもない攻撃が、偶然にもかすただけで消し飛んだのをこの目で見たからだ。

セットしたばかりの投擲スキルを試すには、これ以上ない相手だろう。

「セット……シユート！」

と、俺は規定の構えをとり、右手に握ったダガーを、仄かなグリーンの光を纏わせながら放つ。

ダガーは、セットしたばかりで熟練度も上がっていないスキルで打ち出されたにしてはちゃんと飛び、俺が息を潜めて見つめる中でフライアーミンを狙っていたと思われる大型蜘蛛モンスターにヒットし、一発で消し飛ばした。

「What's?」

思わず違う国の、世界共通言語を口走った俺を、誰も責めることは出来ないだろう。

それだけ、予想外の出来事だった。

しかも、俺にとって最大の驚きがこの後やって来る。

「おう………いつたいどうなってんだ？」

なんと、偶然にも助けた形になっていたフライアーミンが、全く意図していたのとは違うが、俺のタイムモンスターになったようだ。

「しっかしよあ、おめえはとことん規格外な奴だよなあ……」

「……悪かったな」

「いやいや！そのおかげで貴重な情報を手に入れられたんだ、まったくフレンド様様だぜ」

上から、クライン、俺、ロイドだ。

右端の時計はAM10:19を示している。

あの後、具体的にはフライアーミンをタイムしてから村に帰り、目ざとくクラインにそれを見つかったから、俺たちはクエストに出かけることになった。

今は、村の中を歩いている。

どうやら風林火山のメンバーの一人が、朝、村の中で情報を集めたところ、一つ気になるクエストがあるというのだ。

そのクエストは、病気の子どもを治すために、特定のモンスターがドロップするアイテムを入手してきて欲しいというもので、報酬にはなんと、かなり使い勝手の良い片手剣が貰えるそうだ。

噂では、そのクエストをいち早くクリアしたのは、白の麻シャツという初期装備の上に、茶革のハーフコートを羽織った片手剣使いの男だそうだ。

「はじめてあった時もよお、おめえ、そのまんまの顔でインしてたんだもんな」

それは時間が無かったからだと言いつつは訳しただが？

これで既に三回目になるうという、クラインによる俺の馬鹿話を聞きながら、じとつとした目で睨みつける。

「俺とキリトが元に戻って驚たときもよお、こいつしれつとした顔で……わ、わかった！もうしねえから、そんな目でみんなっ！」

はて、そんな目とはどんな目だ？

それこそしれつとした顔で、すましておく事にした。

クラインはいい奴なんだが、たまにこういう“弄り”が入ると面倒くさい。

「で、そのクエストのフラグは建ててきたの？」

「おう。もちだぜ！」

俺の問いに答えたのは、風林火山でも比較的背が低い方である、

少しゃんちゃそんな顔をした片手剣士だ。

名前はレット。

速さ重視で、軽めの革鎧に防御は低くなるが俊敏値が僅かに上昇するブーツなどを装備している。

色は薄茶を重視して揃えているようだ。

このクエストの情報を持ってきたのも彼で、そのときの顔はちょっと笑えた。

しかし、こうやってクエストに出ることになると、自分がこのギルドの面子と一緒にいることに疑問を感じざるを得ない。

元もと、自分の対人スキルの無さを理由に始めたゲームだ。今となっては、その目標すら遠く霞んでいるが。

だが、こうやって意図していないところで新たな出会いや発見がある。

というか、意図していない方がすんなり進んでいる気がする。

「(今までって、もしかして考えすぎてたのか?)」

まさかの発見に、驚く。

俺は、自分の友達が出来ないことこの理由として、厨二病以外の理由を見つけたのであった。

「せえらっ!」

「りゃあー！」

「うおおおおおー！！」

様々な掛け声が、色とりどりのライトエフェクトと共に響く。

それはまるで、夏の夜空にはじける、花火を彷彿とさせているように……

「フレンダ！スイッチー！！」

「……ッ！？おうつ」

絶妙なタイミングで、目の前の気色悪い緑色の唾液を吐き散らす、植物型のモンスター“リトルネペント”の胴を、海賊刀で強打し、一瞬の隙を作ったクライスが、俺に向かって鋭く指示を飛ばしてきた。

なんの躊躇いもなく、それこそ一瞬の迷いが失敗に繋がるコンボゆえ、俺は片手短槍の重単発攻撃スキルである“スメウニードル”でスイッチをした。

スイッチとは、自分が戦闘中のモンスターに強攻撃を与えることのできる“間”を利用し、仲間と瞬時に入れ替わることをいう。

つまり、わざと戦闘中にブレイク・ポイントを作り出し、仲間と入れ替わることで、モンスターの動きを鈍くさせることが出来るのだ。

モンスターにはAIPログラムが一体ずつ、完全にほかのモンスターとは独立して、搭載されている。

そのことで、モンスターは戦闘中に、プレイヤーの戦い方を観察し、学習することで、対応力を逐一向上させているのだ。

その特性を逆に利用したのが“スイッチ”だ。
敢えて特徴の違う攻め方をすることで、相手の処理速度を下げる、波長の違う攻撃を繰り返すことによって、モンスターの動きは、新しい戦い方を学習しようとして、ラグが生じ、結果として動きが鈍るという現象を引き起こす。

現に、海賊刀を使い、スキルを多用して攻撃していたクラインから、ステップで動きを避け、隙を突いて攻撃を仕掛ける俺に代わると、リトルネペントの動きは目に見えて鈍った。

すかさず、その機を逃すことなく、俺は三段攻撃“デルタファースト”を発動させ、三連撃はクリティカルヒットを繰り返しながら、リトルネペントの命の花弁を散らせたのだった。

「ふう、こいつも違ったか……」

「ああ、こりゃ大変な作業だぜえ……」

丁度少しはなれたところでも、ロイドとレットがリトルネペントを倒したところで、ほかのメンバーも確実にダメージを与えている。

一足早く倒した俺とクラインは、少しばかりの休憩と称し、これからの行動を考えていた。

どうやら、このクエスト、ただたんにリトルネペントを倒し続ければ良いというものでもないらしい。

ドロップアイテムを手に入れるには、花の咲いているタイプを倒さなければいけないらしい。

今、俺とクラインが倒したのが通常タイプ。
つまり、花つきを如何に早く見つけ、そして討伐するかがポイントとなる。

花つきを見つけれないとすると、このクエストは達成できなくなるからだ。

「皆倒し終わったようだし、そろそろ休憩してメシくって、午後またやるっ……」

「ああ、それがいいかもな」

とりあえず、一度村に引き返し、飯を食いに良くという案で話は終わった。

時計を見ると、PM00:18を示していた。

第五話 植物、森、戦闘！（後書き）

どうだったでしょうか？

今回は戦闘に含めて、なんとフレンドがテイマーになりました！
白駒のフライアーミンは、これからフレンドの相棒としていくつもりです。

悲しい別れが無いように祈る！

そして、いよいよクエストが開始されましたよ。

皆、初クエストとは思えないほどの戦いつぶり。

それも、始まりの街を出て直ぐの森での経験が生きたのでしょう。

なんとか花つきを見つけて倒したいところですが、腹が減ってはなんとやら。

とりあえず一行は村に戻りますね。

クエストは次回も続きますよ！。

そして待っているのは衝撃の展開！？

次回、前書きでまた。

第六話 実つき、花つき、異常ポップのその後は…（前書き）

て、てててテストだあああああ！！
っと、日々悶えている鳩胸です。

テスト期間中なのに、小説の事を考えては頭を悩ませるひび。
これはもう、赤覚悟で行きますわ。

さて、今回の話です。

前回、花つきが出てこないので一度村に戻った一行。
ミーティングの後、彼等は再び森の中へ。

そして、今回の話が始まるわけです。

プロットの残りも僅か…。

授業中返上で、次の話を練っている状態。

いやあ、頑張って書きたいと思います。

それでは後書きでまた。

第六話 実つき、花つき、異常ポップのその後は…

「うおりゃあああ!!」

「せらあっ!」

俺とクラインの攻撃が、赤と青のライトエフェクトを上げ、空中に線を描きながらヒットする。

次いで

「スイッチ!」

その声で、俺とクラインは後ろに下がる。

同時に、ロイドとレッタが各々の武器を掲げながら目の前に割り込んでくる。

衝撃と閃光と共に、俺とクラインの目の前に居たリトルネペントは後方に弾けとんだ。

「行くぞ!次はあそこだッ」

「おうよ!!」

俺の声に続きクラインが声を荒げ、右手側で苦戦している三人の方へ走る。

スイッチした二人は大丈夫だろう。

俺たちが戦っていたリトルネペントは、残りHPが半分を切っていたし、スイッチ効果で動きも鈍くなっていたからだ。

「アキラあ!リムートお!スイッチだ!!」

クラインの声で、苦戦していたうちの二人が強攻撃を無理やり仕掛けた。

「ば、馬鹿ッ」

後ろから見ていた俺には、アキラが焦って攻撃を仕掛けたのが丸分かりだった。

俺は、その行動の危険さに気づき、スキルを発動させる。
スメウニードル。

レベル5の俺にとっては、すぎるほどの攻撃力を誇る突進技だ。

「う、あッ!?」

想像通りか！

アキラは、無理に仕掛けた攻撃により、逆にカウンターを貰い後ろに飛ばされた。

発動したソードスキルは、濃い赤色のエフェクトを纏いながら、倒れ伏したアキラに襲い掛かろうと口を大きく開けたリトルネペントの顔を、一撃で吹き飛ばした。

現実世界ではスプラッタな光景になること請け合いなものだが、デジタルでよかった、リトルネペントはポリゴンの塊へと変わっただけだった。

「す、すまない!」

「後ろだ!」

「え!?…ぬぁ!」

戦闘の最中に礼を言うのは危険だ。

アキラは更に後方からきたリトルネペントによって、弾かれた。

HPは半分を切り、すでにイエローゾーンに到達している。

「クライン！」

「おうよー！」

すぐさま近くに居たクラインとスイッチ。

俺より敏捷値に長けるクラインのほうが、アキラの元へ早く辿り着ける。

それを見越してのスイッチだ。

クラインの戦っていたリトルネペントを引き受け、こんどはスキルを発動せずに怒涛のラッシュをかける。

既に残りのHPバーは減っていたためか、直ぐに掻き消えた。

クラインも、アキラの補助しリトルネペントを倒したようだ。

午前とは打って変わり、昼食をとり、再び森へ戻った俺たちを待ち受けていたのは、異常ともいえるほど沸いた動く食人植物の群れだった。

「一体なんて無理ゲーだよ！」と、皆で叫びながらも突撃した俺たち。

風林火山八人+俺の九人で、約二十数匹のリトルネペントの群れに戦いを始めたのだ。

もう何回目だろうか？

再びリトルネペント三匹に囲まれた俺

「だらっしやー！」

こつなつたら自棄だ！

俺はスメウニードルを連発し、緑の食人植物の群れから脱する。

「やばいなこりゃあ…」

ぱつと見、残りのリトルネペントは十数匹だ。

対して俺たちは回復アイテムも数を減らし、更に疲労もたまっているみたいで、先ほどのアキラみたいなミスをしているのが見える。

「…分断されてるか」

良く見ると、風林火山のメンバーは二分されていた。

クライン含む六人と、残りの槍使いを片手剣士の二人だ。

スメウニードルを再び発動。

クラインたち六人から分断されている二人の元へ、血の様な赤色を吹き上げながら突撃を開始する。

HPがかなり減っていたのだろう、二人を囲んでいたうちの二匹のリトルネペントを消滅させ、しかし俺も囲まれた状態になる。

「フレンダあ！そっちは頼む！！」

「任せるッ！」

クラインの声に叫び声で返し、短槍を思いっきり叩きつけて、大口を開けて迫ってきたリトルネペントを地面に叩きつけ、それを踏みつけるようにしてHPバーを消し飛ばす。

「フレンダ、頼む！」

「俺たちはこいつを」

分断されていた二人は、一体のリトルネメントに向かっていった。残されたのは二体の緑。いやいやいや、一体二と二対一って！おかしいだろ！？

そんな俺の叫びは何処へやら、二人はわき目も触れずにひときわ目立つ、茶色の実をつけた奴へと……。

「ま、まてっ！！」

事前に調べた情報には、リトルネメントには三種類あるらしいってことが含まれていた。

なんと、出現率は異なる三種類で、一番沸くのがノーマルのリトルネメント、次いで実がついている物と花つきといわれるもの。

クエストに必要なアイテムをドロップするのが花つきで、倒してはいけないのが実つき。

俺の聞いた話だとそうになっていた。

二人が攻撃してるのは実つき。この中では一番危険な奴だ！

「く、そ。邪魔だッ！！」

短槍の軽連続攻撃スキル“バレットスマッシュ”で、二体の緑を交互に叩き、少し交代させたところでデルタファストを発動させる。このバレットスマッシュは、攻撃後の姿勢がそのままデルタファストに繋ぐことが出来るので、俺はそれを繋いで仕掛ける。

連続で叩き込まれた攻撃により、二体のリトルネメントは姿を散らし、俺は二人に視線を向けるが…

「「よっしやあ!!」」

既にとき遅く、二人は実つきを討伐し終えていた。

「おいフレンダ！そっちはどう…」

クラインが、向うも討伐を終えたのか、すこしはなれたところから声をかけてきた、が。

パン！

「うわあっ!?!」

「な、なんだ!」

消え去る直後、リトルネペントからおちた“実”が地面に到達した。

けたたましい破裂音と同時に、周囲にいやなおいの着いた煙を撒き散らした。

「ど、毒か!?!」

「やばい!口を塞げ!!」

二人が、煙の中で叫んでいるのが聞こえる。
対して俺は

「そ、それだけなのか?」

すこし肩透かしを食らったような気になっていた。

警戒するように言われたが、嫌な臭いのする煙を撒き散らすだけ

ならば、さほど問題は無いように思えた。

もしかすると、帰りの道でモンスターのエンカウント率が高くなるかもしれないが、これほど異常なポップを見た後だ、何が来ても対応できるだろう。

そんな、軽い気持ちでいたのが間違이었다。

「よお、なんだこの煙は？」

「うへえ、くっさ！」

「おわあ、こりゃこたえるわ」

追いついたのか、クラインが肩をたたいてきた。

「ああ。これは実つきを…」

俺はそれになんとも無いというように、返事を返そうとした、そのときだった。

「「うわああああああああああああああ」」

二人の悲鳴、次いでガシャンツという、モンスターが死んだときに聴こえるガラスを砕いたような音が響いた。

嫌な予感が体全身を貫く。

そんなはずは無いのに、冷や汗が止まらないようだ。

向こう側が見えないくらい濃かった煙が、いきなり晴れた。

そしてそこには、どこから集まったのか異常な数のリトルネペン
トと

「お、お前らあつ！！？」

串刺しにされた片手剣士と槍使いの姿があった。

第六話 実つき、花つき、異常ポップのその後は…（後書き）

はい、後書きです！

いやあ、このパーティーには異常ポップがつき物なのか？ってぐらいモンスターに襲われているわけですが、今回はやばそうですね。

煙の中に消えた二人。

悲鳴が聞こえ、そこには一人の姿しか見つからなかった。

なんて、推理小説チックな感じではないんですけどね。

引き伸ばしますリトルネペント編！

本当は一話完結予定だったのに。

多分次回がラスト。

それでは皆さま、次回の前書きで。

第七話 つらい現実、向き合う未来（前書き）

いいいいいいやっほ〜い！テストが終わったぞ〜い！！

てなわけで、漸く長かったテスト期間が終了、投稿することが出来るようになりました。

いやあ、長かった、疲れた！

まあ結果はオワタなんですけどね（笑

さて、前回のあらすじから。

クエスト完了に必要なアイテム、リトルネペントの胚珠がなかなかドロップしないので一度村に戻ったフレンダ一行。

昼食をとり、再び森までやってきました。

そこで、午前とは比べ物にならないほど沸いた、大量のリトルネペントを発見。

全員で特攻したところ、分断されつつも殲滅完了。

しかし、フレンダの静止を聞かなかった二人が『実つき』とよばれる、リトルネペントに攻撃。

実つきの効果により、沢山のリトルネペントが何処からか出現、二人は串刺しに、武器は耐久値を超えて壊れた。

こんな感じですね。

さて、今回は第一章のクライマックスとも言えるバトルシーンです。クラインたちは仲間を助けることが出来るのか？

そして私は赤点を取るのだろうか？

それでは後書きでまた。

第七話 つらい現実、向き合う未来

一瞬、俺たち全員の思考が止まったようだった。それほどの衝撃が、俺の全身を伝っていった。

「あああああああッ!!」

ッ!?

そして、再度叫び声が木霊したところで、俺は呆けていたところから意識を戻した。

二人の姿は、リトルネペントの“壁”に阻まれ、既に見えなくなっている。

「なッ!ま、マズイ!!」

目の前の場景が理解できずに止まっていたのは俺だけではなかったようだ。

クラインたちよりも早く、俺のほうに先に行動を起こした。

俺と二人の距離、その差約20mほどだ。

障害が無い状態ならば数秒で詰められる距離。

しかし、この途方も無い異常なほどのリトルネペントの群れは、俺の速度を大幅に遅らせてくるだろう。

それまで、二人のHPが足りるのか、正直言って危うい。

「スメウニードル!」

全力で行かねば、おそらく二人は助からない。

この世界に着てから初めて感じる死への恐怖。
それも、自分ではない他人の死に対しての恐怖。

赤のライトエフェクトが、槍の矛先から発せられ、俺の全身を包む。

「……おおおおおお！！」

雄たけびを上げ、周りの景色がぶれるほどの加速。

矛先を前に向けたまま、槍を突き出しながら壁に突っ込んだ。

俺の一撃は、しかして二匹のリトルネペントに抑えられていた。

あの、異常とも言える先ほどまでの戦いによってLvが上昇していた俺の攻撃も、流石に二体を貫通するには至らなかったようだ。前に居た一匹は消滅。後ろの一匹のHPバーはレッドになっている。

「ど、っけえ！」

二人の姿はもう、大量のリトルネペントによって俺の視界からは捉えることが出来なくなっている。

それほど厚い、このモンスターの壁。

「らあああああ！！」

バレットスマッシュ、デルタ・ファスト、エインズ・スキャルグ
少し間が開きスメウニードル。

色がドンドンと変わり、なんでもないときならば見とれていたであろう光景も、今は何も感じない。

より早く、より確実に、二人を助けるために俺は槍を振るい続けた。

全ては、俺のミスを取り戻すため。

全ては、自分のために。

結局のところ、俺は自分のために戦っているのだ。

「フレンダあ！」

怒鳴り声、に続いて見慣れた海賊刀が真横から伸び、一体のリトルネペントのHPを削った。

クラインは、今にも泣き出しそうな表情を浮かべていた。

泣き出しそうな顔で、必死な形相を浮かべ、ソードスキルを発動させて進もうとしている。

「おおおおお！」

「だっ、らアア！」

さらに続いて、ロイドたちも一斉に攻撃を始めた。

傍から見ればなんと滑稽に写ったであろうか。

いい年こいた大人たちが、皆一様に涙目で、皆一様に必死な顔で、そしてモンスターを討伐していく様は。

いくら足掻いても掴めない物は存在すると、いくら努力しようが変えられない未来があるのだと、どうしてわからないのであるうか。

……いや、分かっているからこそ、皆はこんな表情を浮かべているのだろう。

そう、この先にいるであろう二人は、俺たちでは助けることなんて出来ないという未来を予想しているからこそ。

その未来が鮮明ビシヨクに思い描けるからこそ、俺たちはこんなにもつらい表情を浮かべているのだと。

そして、俺たちの攻撃は…

ガシャアアン

「な、あ、ああ…」

届くことは無く。

無残にも、俺たちの目の前で二人は体を貫かれ、そして物言わぬポリゴンの塊と変わり果てたのだった。

そこから、俺の記憶はとんだ。

夢を、見た。

真っ黒い世界に、俺が二人いる。

一人は制服を着た向うの世界の俺で、もう一人は槍を背中に持つこちらの世界の俺だ。

俺は、俺に問う。

何故、二人は死んだ？

俺は、俺に答える。

俺が、正確に情報を伝えなかったから。

俺は、俺を睨みながら

俺は、どうして伝えなかった？

俺は、俺から顔を伏せながら

伝える暇が無かった

いいわけだった。

誰に対してでない、俺に対して。
自分に対しての言い訳だった。

本当に？

でも、俺は俺で、それは偽りようがなくて。
誰だって自分に嘘は突き通せないものなのだ。

本当は、俺が伝えそこなっただけ

そう、時間はあつた十分に。
十分にあつて、でも伝えなかつた。

結果

二人は死んだ

死んだ、死んだ。

本当に？

本当に二人は死んで、この世界からも向うの世界からも消えたのか？

そう、芽場が言っていた

それはアイツが勝手に言っただけ。

…そうだよ！二人は生きてるんだ！今頃向うで目を覚ましてるに
違いない！

そうやって、自分を偽る

……そうじゃないと、俺が壊れる。

二人を殺したのは俺だって、俺が情報を伝えなかつたから二人は
死んだって。

そんなの、耐えられない。

分かっているんだろ？二人が本当に死んだことが

分かってる

あの目を見たとき、二人の目を見たときに感じたんだ

この世界の死が、現実世界の死に繋がっているということ

そう。

今までは、お遊び気分だったんだろ？

そう。

死ぬことなんてないって、本当は馬鹿にしてたんだろ？この世界を

そう。

そのセイで、二人は死んだ。

そう。

そうなんだ。

全ては俺のせい。

俺がこの世界を軽んじていたから。

俺がこの世界を認めていなかったから。

だから

俺は、この世界を認めなきゃいけない。

二人の死を、償わなきゃいけない。

たとえば、俺がそれで死んだとしても

この現実を受け入れていない人が、俺のように遊び半分でいる人がどれだけいようと。

俺は、このゲームを^{現実}クリアしなきゃいけないんだ！

『だったら、こんなところで寝てる暇なんて無いはずだよ？』

「っ!？」

視界に広がったのは、真っ白い空間だった。

さっきまでの真っ黒とは違って、対照的に、ただなんにもない白い空間が。

いや、その空間には俺が居た。

一人の俺が居た。

そして、一匹の白い鼯がいた。

『君は気が付いたはずだ、この世界の真実に』

そうだ。

ゲームでも遊びでもない、このもう一つの現実に。

俺は初めて気が付いたんだ。

『そして君は受け入れた、自分の罪を』

俺の罪。

二人を殺した俺の罪。

『それは君には背負いきれないもの？』

そう。

……いや違う。

背負いきれなくても、俺が背負わなきゃいけないものだ。

どれだけ罵られようと、どれだけ蔑まれようと。

たとえ人殺しと責められようと、皆が俺から遠ざかろうと。

俺は一人になっても、この世界を進めなきゃいけない。

『君は力を持って、それを使いこなせる』

俺の力？

『そう、君の力。現実を現実として受け入れることが出来る、精神力』

精神力？

『一見頼りなさげに見えても、関係無さそうに聞こえても、それは君の大きな力だ』

大きな力。

『その決意は、揺らがせちゃいけない』

決意。

覚悟。

それは、このゲームを終わらせるという誓い。

『だから君は起きなくちゃ』

そうだ。

こんなところでもたもたしてる暇なんて無い。

『僕は、待ってるんだ。君が僕を助けてくれたように、僕が君を助けるときを』

お前は、一体？

その問いに答えてくれるものは居なく。

「フレンダあ！」

俺は聞いたことのあるような、クラインの切羽詰った怒鳴り声で目を覚ましたのだった。

「もう、行かないと
『そうだね』

時刻、A M 6 : 2 0。

朝霧に包まれている村の、出口に俺は居た。
肩には白駒の“リム”を乗せて。

あの後、俺が不思議な夢から目覚めると、クラインたちが俺を囲んでいた。

どうやら、俺は二人の死を目の当たりにして、絶叫しながらむちやくちやに暴れ、周りに残っていたリトルネペントを一掃した後、気絶したんだそうだ。

クラインたちは、暴れる俺に手出しが出来ずに見てることしか出来なかつたらしい。

俺が気絶すると、すぐさま抱えて、村まで戻り部屋を取ってくれたそうだ。

そして、丁度俺が夢を見ていた頃なのだろう。

俺のタイムモンスターになった白鼬、もといリムが何処からとも無く現われ、俺の額に鼻先を当てたそうだ。

何故かそれで光を帯びた俺は、その光が収まり、リムが俺の腹の上で丸くなったとき目を覚ましたらしい。

その時は、俺にも何がなんだか分からなかったけど、クラインたちに今回の事の結末を話した。

夢の事はしつかりと覚えていたし、これからの事に対しての区切りみたいなものだと思って。

クラインたちは重い雰囲気の中、皆ただ一言だけ「お前のせいじゃない」と言ってくれた。

たとえ情報を伝えていたところで、あの二人なら突っ込んでいただろうと。

付き合いが短くても、そのくらいは分かる。
そういつて、その後塞ぎこんだまま解散した。

その一日。

ただ何をするんでもなくて、目標というか決意を固めた後で、俺はそれでもモンスターを見ることが怖かった。

二人の死を思い出してしまいそうになるんじゃない、二人の死から目をそらしてしまうように。

だから宿の裏で一人でひたすら槍を振り続けてたんだ。

『なにやってんの？』

声が聞こえたのは、その時で。

俺が始めてリムの姿を、ちゃんとみたのはこのときが初めてだった。

何故モンスターから声が聞こえてきたのか、俺は聞いた。

何故モンスターが、タイムしてたからとはいえ、俺に不思議な現象を起こさせたのか。

『僕はこのゲームのシステムの一つだから』

リムはそういつた。

なんでも、リムは最初から最後まで芽場によって整備されたただ一つのAI。

>メンタルヘルス・カウンセリングプログラム<、略称MHCPと呼ばれるものだという。

このゲームのシステム>カーディナル<の開発者達が作り上げた試作のその他とは違い、芽場が唯一このゲームに組み込んだAI。

それが、白鼬の姿をしているリムの正体だというのだ。

何の目的で、なんの意図で作られたかわからないが、プレイヤーの精神に介入できる力を持ってこの世界に作り出された。

僕も何のためにいるのか分からなかったんだ、とリムは言った。

『でも、君に助けられて、君が倒れたのみで、僕は力の使い方を感じたんだよ』

『僕の力はこうやって使った、君をあの闇から救うために僕は芽場に作られたんだ、ってね』

なんて、恥ずかしいことをずかずかといった後、リムは俺の肩を定位置としたのだった。

「なあフрендаよお…。ほんとに行くのか？」

「ああ、俺は行くよ…クライン」

村の入り口、そこには俺とリムと、そしてクラインが居た。

今回の事と今後の事、クラインには話しておこうと思って俺が呼んでいたのだ。

これから俺は、一人で進む。
一人でクリアを目指して突き進む。

「だからさ、ここで一旦お別れだ」

「ったくよお、お前もキリトも……。なんでオレがかかった奴
つてなあ、一人で行くことを選んじまうのかねえ」

「キリトのことは知らないけどさ、俺は自分で決めたんだけ。それ
に、クラインには感謝してるよ」

本当に、クラインには感謝している。

正確には、クラインと風林火山の皆にだ。

「だから、また会おう」

「おう。…また、な」

槍と海賊刀。

俺とクラインの武器がぶつかり合う音が、周りに心地よく響く。

これは別れの言葉。

再び何処かでまた会おうという、言葉の代わり。

『ほんと、君達は格好つけたがりだね』

そんなリムの冷やかしを無視して、俺は振り返ることなく村を後
にしたのだった。

第七話 つらい現実、向き合う未来（後書き）

ふう、なんかシリアス？な回でした。

フレンドがこの世界に対する自覚を持つと共に、前にちゃんと踏み出すための回にしようと思っけています。

ついでに白駒のキャラ位置もハッキリさせて置こうと思っけています。

どうだったでしょうか？

実は始めてのシリアス展開でありまして、勝手に分からないものにして…。

ちゃんと書けているかどうか、読者様にちゃんと伝わってるのかどうか少し心配な私でありました。

さて、次回は少しばかり時間が進みます。

一人、一人と一匹？が村を出てから成長し、一人の少女と出会う。そんな展開を考えております。

それでは皆さま、次回の前書きでまた。

第八話 五カ月後（前書き）

ちわつす、鳩胸です。

近々パソコンが使用不能になりそうな今日この頃。

皆さまはいかがお過ごしでしょうか？

はい。

私は小動物のようにびくびくしながら、テストの返却を待っている状態です。

……はあ、テストとか爆発したらいいのに。

さて、今回ですが。

なんと前回クラインたちと別れてから五カ月後、攻略も進みこの世界に慣れてきたであろう五ヶ月後からお送りします。

ちょうどこの頃、原作ではキリトが月夜の黒猫団に加入しています。

まあフレンドの場合、目的がありますからまだギルドには入らないでしょうがね。

そんな彼にも、次回ですが出合いがあります。

皆さまの期待をいい意味で裏切れるような、そんな登場の仕方が出来ればいいなと思いつながら。

それでは、後書きでまた。

第八話 五カ月後

ゲーム開始から、約五カ月後。

前線より九層下の、とある狩場にて。 P M 1 0 : 2 0 。

「 オオオツ！」

水色に煌くライトエフェクトが、水流のような線を真つ黒な背景に描きながら激突する。

両手長槍の単重攻撃スキル“クオーツ・ディレクト”が、モグラ型モンスターであるエイプンを粉々に吹き飛ばした。

後から後から沸いてくる、地面からドンドンとエイプンが顔を出してくるこの狩場は、俺たちの間では「もぐら叩き」として呼称され、お遊び程度の難易度に認識されていた。

というのも、このエイプンというモグラに黄色いヘルメットをかぶせたモンスターは、物凄く弱いのだ。

それも、同Lvのプレイヤーがスキル一発で仕留める事ができる位に。

経験値もさほど入らず、それでも出てくる量が量なので一応危険。リスクが少し高めなのに比べ、リターンがほぼゼロというこの狩場は過疎化していた。

この時間帯では、周囲二百メートルほどのこの狩場には人っ子一人存在しないだろう。

そんな時間に、何故俺がここで槍を振り続けているかというと、

単に武器の強化素材のためである。

使い勝手や使用方法などの差異から、俺は使用武器を片手短槍から両手長槍にチェンジしていた。

無論、片手短槍を全く使わなくなったわけではない。

ただ、ソロで進めるにはそれなりに攻撃力のある武器が必要になっただけの話だ。

五ヶ月ほど前、クラインたちと別れた俺はひたすらに強さを求め続けた。

来る日も来る日も攻略そっちのけでLvアップを目的とした狩り続け、また、ボス戦時には単独ソロで特攻をかける等してドロップアイテムの優先順位を狙ってみたりして、>狂戦士<と呼ばれたり。早くに出来た大手ギルドからは“はぐれメタル”とか“単独馬鹿”などと呼ばれる始末。

気にはしていないが、ネーミングセンスを疑った。

ボス攻略などではクラインたちとも会ったが、戻って来いなどとは言われなかった。

皆それぞれ目的がある、その元で行動しているなら言う事は無いさ的な感じで。

軽く挨拶を交わし、戦略を立て、共闘する。
そんな軽い関係だ。

それでも他のギルドよりはやりやすいが。

「そおいー!」

後方から襲ってきたモグラを、スキルではなくただの攻撃で掬い上げるようにして打つ。

飛び掛ったところを腹の下から強打され、より上にあげられたモグラは手足をばたばた動かす。

が、そこにすかさず一発。

俺が使える長槍スキルの中でも、攻撃に特化したタイプの単撃スキルによって、モグラはポリゴンへと返る。

残りのモグラは五匹。

そして何故か一斉に飛び掛って攻撃してきた。

「終わり、だ！」

武器防御スキルの中でも少ない、跳ね返しの技。

手を離れた槍は落ちることなく目の前で回りだし、そのリーチも相まってか、回転速度を増し、丁度俺を全部覆い隠すほどの大きな円を描く。

それはさながら盾のようで、俺を覆い隠した盾にモグラ五匹は衝突し、そして有無を言わせぬまま消滅させられた。

カウンター効果を持つこのスキルは、武器防御スキルの中でも両手長槍にしか存在しなく、受けたダメージの合計に追加で50%のダメージを攻撃してきたものに食らわせるのだ。

つまり、モグラ五匹の一撃+50%がモグラ一匹ずつに与えられたというわけ。

本来エイブンは、自分の攻撃の1.5倍のダメージを受けてもHPが尽きることは無いが、さすがに5.5倍のダメージは無理だっ

た様だ。

『あ、でたよアイテム』

「おお、そうか。さんきゅリム」

モグラが落とすアイテム、土の水晶が俺の求めていたアイテムだ。今使っている俺の相棒、銘をキュアソーンという茶色い水晶のような材質の両手長槍の強化するための素材として、この土の水晶が必要だった。

まあ、別にこの武器を強化するための素材として、土の結晶を使用するわけではない。

俺が懇意にしている職人プレイヤーが、この土の結晶を持ってきてくれるなら強化代金は要らないといったので、今更ながら九層も下の狩場に足を向けたのだ。

そして、俺の首周りに巻きつき肩口から顔を覗かせている白い鼬の名前がリムだ。

始まりの街から一番近くに存在する村にて、俺が仕留めようとした所を、偶然にも助けた形になりタイムした状態になったのだ。

その後、仲間を二人失うという事件が起きたとき、コイツが芽場によって作られたただ一つの特別なAIだということを知ったのだ。

そこからはリムと俺の二人旅みたいになった。

たまに他のギルドやソロと組むことはあるが、基本ソロで突き進んだ俺はLvを30まであと二つというところまでのし上げていた。

最初の頃と比べ、Lvの上昇スピードが緩やかになっている中で、俺は頭一つほどぬきでている状態だ。

攻略組の中ですら俺のレベルの高さにビーターなのでは？と疑ったり、下層のプレイヤーにはなにか裏があるに違いないとまで言われたことがある。

曰く、俺が芽場の送り込んだ刺客なのだそうだ。

以前、俺を殺しに来たロレッツという男の片手剣使いはそうだった。

「全く、こんな気分ときはさっさと寝るに限るわ」

『そうだね、僕も疲れたよ見てるの』

じゃあ寝てればいいだろ？と心の中で思ったが口にはしない。なぜなら

『そう？じゃあ家に着いたら教えてね』

そう、コイツは俺の精神に介入できるため、考えた言葉などは口に出さなくても分かってしまうのだ。

起きてる状態ならば。

リムは寝ている時、一見すると白いマフラーにしか見えなくなる。少しもこもこしている高級そうなマフラーだ。

「…早くかえろ」

話し相手のリムも寝てしまったことだし、俺も早く街に帰り転移
門からマイホームのある層に帰ろうと、再び湧き出したモグラをな
ぎ払いつつ歩き出したのであった。

第八話 五カ月後（後書き）

今回は少し短め。

最近時間が取れなくて、投稿速度が遅くなってるしだいです。本当に申し訳ないです。

次回はいよいよあの娘の登場。

私の好きなキャラであり、そして原作をそこまで崩すことなく（すんません嘘です）フレンドと絡ませることが出来る人物。彼女の出番を楽しみにしててください。

それでは皆さま、次回の前書きにてまた。

第九話 落下少女？（前書き）

ええ〜今回は、なんと！なんと！！私の個人的に好きなキャラが登場します！

出会う方は原作と大きく異なりますし、この頃の彼女がどういった感じで生活していたか私は知りません。

ですので、設定的におかしな点や気が付いたことがありましたら教えてください。

それでは、後書きにてまた。

第九話 落下少女？

それは突然の出来事だった。

空から人間が降ってきたんだ。

「ああ、暇で死にそうだし…」

一人黙々と、荒廃した大地を歩き続ける俺。

むこうにいた時は、一人でいることにこれ程までに退屈を感じなかった。

常に一人でいたようなものだし。

でも、こっちにきてクラインたちと会って、他のプレイヤーと言葉を交わしていくにつれて、俺の何がかわったんだ。

今では、こうやって一人で黙々となにかをすることに、すごく退屈を感じるようになって来た。

キュアソーンをゲットした俺は、再び沸いてきたエイプンを倒しながら“もぐら叩き”を抜けた。

“もぐら叩き”は抜けるのに関して言えば面倒くささが上がる。なにせ弱いとは言え、かなりの数のモグラがじめんから攻撃を仕掛けてくるのだ。

いちいち倒していたらきりが無いが、倒さずには先へ進むのが困難という面倒くさい仕様。

それでも、ここから九層も上で攻略組の実力を持つ俺からしてみれば、そんなに時間がかかることも無かった。

今は、“もぐら叩き”を抜けてこの層の街へ向かう途中だ。

この層の街から迷宮区までは、草原を抜け崖の間を通り“もぐら叩き”を突破し、さらに砂漠地帯を抜けなければいけないという、なんとも面倒くさい仕様になっている。

というより、この層のステージはどこも面倒くさいのだ。

いちいち沢山のモンスターをぶつけて来るわ、砂嵐で道が分からなくさせるわ、逃げ込んだ安全地帯が結晶無効化地帯だわ。

本当に、この層の設定を行った人物は嫌なやつだと思えない。

おっと、考え事をしてる間に崖の間の道、通称“インゴット鉱山”に入ったようだ。

街に向かう途中に君臨するこの崖の間にある道は、設定では山の間を通ってることになっている。

もぐら叩きを街側に進む場合、三つの道が存在している。

うち二つは山の中に続く道で、ひとつが街へと続く道。

お分かりだろうか？

つまりインゴット鉱山とは、二つの道が続いた先にある山の事で、けっしてこの山間の道（先ほどは崖の間にある道と表現したが）の名前ではない。

というか、この道に正式な名前は付いていないってのが本音。

山間の、それも両サイド崖のように切り立っていて上へ上へは出れないほど険しい。

そんな崖のような山肌（？）の間を歩く道ゆえに、崖の間道とか、そのままインゴット鉱山とか言われていたりするのだ。

珍しいケースだけど、どちらかの山で何らかのアクションを起こせば、山から直接この道へ降りられるそうだと試したことのある奴はいないらしいけど。

『……………いて……………!』

ん？何か聞こえたか？

「モンスターは居なさそうだけど……………」

索敵スキルを上げているおかげで、周囲に潜むモンスターは大抵見極められるようになってきた。

俺のマップにはmobの表記は無い。

『……………ど……………てえ!』

……………いや。やはり何か居る？

どうにも声が聞こえる気がする。

この世界では空耳とかありえないから、おそらく何らかのアクションが起こるはずだ。

なんだ？mob？それともnpc？

「いつたいたんだって……………え？」

『どいてって、言ってるでしょおおおお!…!』

「『じゅあつ!…?』」

「きやあつー!!」

俺の汚い声と、何故か女の子の悲鳴が同時に上がった。
つて！一体なんなの!？

何が起きたんだ!!

「つてて、つたく。一体何が・・・」

上からの衝撃によって地面にそのまま仰向け状態で倒された俺。
どうにも腹辺りに違和感を感じる。

痛覚が鈍いこの世界のシステムに何度目か分からない感謝を述べ
つつ、俺は槍を持ってない左手で頭を抑えながら上半身を起こす。

「つて、なんだこりゃ!」

そして驚いた。

ああ驚いたとも!

一生に一度有るか無いか位の驚きを受けたわ!!

なんと!ピンク色の髪の子!女の子が!俺の上に!乗ってたんだ!!

なんだこりゃ!?

「いったたあ・・・もうなんなのよ!」

そういつて俺の上から体を退けつつ四つん這いの状態になった彼
女は、こっちを向いて「やばっ!」といった顔をした。

うん。

状況説明を頼む。

俺にわかりやすく、かつ原稿用紙一枚分くらいで！

第九話 落下少女？（後書き）

投稿とちゅうに風邪の魔の手にかかった鳩胸です。何か最近投稿間隔が空いてきて申し訳な状態です。

でも、九月は行事が沢山で忙しいんです！

多忙なんです！

リア充になりたいです！！

すみません、最後のはただの願望でした。

ってことで今回。

ピンク色の髪で、インゴットに関係している彼女。

皆さんお分かりでしょうか？

このフロアと、そしてステージ諸々は私の脳内で作り上げられた物なので、原作には一切登場してません。もぐら叩きとかてきとーですんません！

次回は

いよいよ彼女との絡みに入ります。

いやあ、ちゃんと書けるのか

時間とか取れんのか心配になってきました。

それじゃ皆さま次回の前書きにてまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2880u/>

SAO二次創作 戦士達よ強くあれ

2011年9月28日10時46分発行